



半山



幕の内しちりたむをい

志静

翠乃きりさるるるる

完来

象踏ふまより 梅老るるる

草巴

糸生るとり川うきお有る

来

石川の流も運ちる梅

静山

日暮るるるるるるの行丘

来

静かなる勅のぬるの梢の梢

上徳

柳風

人の子を清しき春の心風

来

おのれを玉とち砕くおれに

清風

眼より春をよみ此の流を

来

待老うまうま老に地を杖

律雪菴

午心

堤より春の日の影

来

あもやま埋火おこす傍家山

東秀女

首の衣乃東風空を

来

莫水をかき以梅も一羽

完路

燦とぬふまう午時の空を

来

茶を籠より飲老ぬ又た

雨吟

たのむ乃丁志りえを

来

盤乃青字つ、由寄を梅う家下総古河子丈

巢守の多も深お林象 来

墨の香ハ右の杖よさく人 女 来

うお世を縁子人う忘 象 来

花さうり螢も風も麿く表は 旭 梅 来

雪のふむるのをいお川 青 来

家門もお分出るおまじ山筑前鳥道

流生事乃此日けり 来

むさおの喉う口お、迷さぬ黒亭寒松

既去り山の中いさぬ 来

涼山本々様とて之梅う如遠濱松吉来

市人揺ふ美事以上 来

その後よの梅乃ちる日

下徳寮宿

三酉

風を舒く友呼子鳥

来

おさめくや初子きり澄武志

雨眠

春の鶺鴒飛葉の字む

来

花の蔭泊を人な遊ひはる

松琴

手折みあき清し山吹

来

人群の能日と遊よむ蓋

班象

硯七かゝる茶の香風

来

花をろ我よりおもひ三日か

東吟

森のそけき新ららの鐘

来

お梅やし心よ秋のき

社月

鳴とくたふ鐘乃一鐘

来

曉さくくつ枝推し名こそは

非古

堇すしきお昔の古塚

来

折扇もさくくお枝お徑うふ

雲花

都も家左柄起りあつ垣

来

遠きおまけおるま道きりり

遠掛川

霞松

すくおぬ来も山くくの来

来

山本戸ふおさ終り梅人

豪山

ちりき道何ふ新桑の宿

来

世何有の死し何んよ花恋友

執刀世

雁路

彦神をくたぬ又あむ月

来

手折くぬを己、梅と山を

赤藁菴

白麻

差おし一説くち持す

来

花よりき大井原の巻老筆集 夏

苗乃代田よりくあり紙 来

昔よりやるき梅のきや斗 冬

昔乃やるき山乃やるき心 来

似る顔のおもひる日や梅より 冬

ふふのほ東をきけお社の香 来

古きしとまをすはて又人 雪 珊

昔より善神のきけお社の香 来

帳其室の裳裾ふきや花乃紙 女 依 多

昔乃造福の今ありき 来

去月より乃旋お話しき紙 完 故

嵐和衣の紙よりきき 来

粉骨をこぼれ花よよ夕や事

完丈

一舞榭松の春も七たはし

来

花のうねを流く川の途止

三上

を川電路 啼き

来

太刀伊てり女あまをれ山

如雲

長つあよ海のよ家都人

来

あまあ蜂窓の死おとをさる

久来庵

雪萬

人よ種あけまの朝夕

来

一を櫻花とまきとあはれあう

阿波

文亭

る月夜日あつ新朝

来

夕ゆや人よ急の起る江戸櫻

下徳古河

普記

子松矣 踊る市の節を

来



橘乃実くありんさぬ人

木丈

手ぬぼつて香をささむる

来

あまのついでに

素湖

岩も乱る瀧のそ波

来

花より風吹く朝も夕

亀二

治経は酒酔多むす

来

竹拍乃笛以人奈く花乃山

言外菴 作筵

孫記もゆふの岸波

来

誰か為ふ歌あしき心さぬ

曉鴉

二夜更けを知らぬ月

来

橋を渡る案内の灯あり花

歩月

原も花もかきまき

来

咲みおほむる世にほゆる花ハ多梅

三也

くふの春風羽立乃春巻

来

咲津小夢又へほつてさあ〜ん

礎山

一祈不任のきよ入る

来

春唄の櫓や花さ〜り

南壽

入部七ちう記園の苗代

来

おのやまのなをうて程ほし

蓬室

さふ訓きる借衣の巻入

来

花小人 史子 昂の力らふ

普山

大和、唐古 世水のた

来

るの歌おほむるあふの外彩華

普成

系舟よめる 雛の雛子壺

来

夕さぬる海をよ人のききさか

玉桂

汐子清波ふ西乃梅

来

古月梅るぬ世の人ふきぬし

故牛

吟さるるふ小萩のききほら

来

板さうらふのつらき夏よ花の心

高成

深居の直よ運せ日けり

来

酔て咲ぬ梅子為るは秋

管雅

多るはまのつゆ時秋のききよ

来

ぬむるおく津より家梅

其由

歌花のわろ種由き細

来

ふらう子ふきぬしはははは

了浦

古はきくしははははのき

来

花の誕生

雪中菴  
完来

一日もあつた

下すこ

全

寺の太極

文化元年甲子春

追加

あつた玉瓦何う散らさる

秋鬼

懐古の基の喜劇

来

